



Title	地域子育て支援拠点におけるスタッフの学習と連帯
Author(s)	榊, ひとみ
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 119, 1-26
Issue Date	2013-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.119.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53810
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_119_01.pdf



地域子育て支援拠点におけるスタッフの学習と連帯

榎 ひとみ*

【要旨】 本論の目的は、小出（1999）の「支えあいの子育て」論をより分析的に展開していくことである。「支えあいの子育て」とは「循環する支援構造」を有する実践であるが、では、「循環する支援構造」はどのような条件のもと生成されていくのか。本論では、A県B市で地域子育て支援拠点事業を行っている実践Dを事例として、循環型の支援構造の条件について検討する。

実践Dは、循環する支援構造を有する支援実践と捉えられるが、その組織内部にも循環構造があるものとして結論づけた。つまり、組織の外部にむけて「循環する支援」が展開している実践は、その組織内部においても「循環する支援」が進展しているのではないかという仮説が提起できると考える。

本論の分析から子育て支援実践においては、支える側のスタッフにも「支え」の構造が必要であることが論点として提示できる。その際のポイントとして、スタッフ自身の自己表現と自己開示とともに、スタッフ自身の自己肯定感の回復が、実践の基盤となるスタッフ同士の連帯を形成するための欠くことができない重要な要素としてあげられる。

また、分析からは、実践Dが支援のあり方を変容させたことが分かった（【図5】）。それが可能となったのは、【図5】にみられるように、スタッフが自らの実践を対象化し、子育て問題認識のレベルで問い直しを行い、自らの支援のあり方に向きあったからだ。自らの実践に問いを立て、その限界を見つめようとするのには困難が伴うが、それが可能になったのはスタッフが、共に活動することで生まれる信頼関係に支えられていたからではないかと考える。

【キーワード】 循環する支援構造、課題の共有化プロセス、信頼関係、実践の対象化

1. 問題の所在

子育て支援の領域に限らず、広く社会福祉の領域において「支援する—支援される」の非対称性の問題は、この間の重要な論点となっている。このことが、重要な論点たり得たのは、「支援—被支援」の非対称性が、「支配—被支配」の関係に転化することの問題性、また「支援—被支援」の非対称性が固定化することで、支援が必要な部分ばかりに焦点が絞られ、その人に本来備わっている潜在的な力には関心が払われず、支援されることで、逆にその人が本来持っている力が見落とされてしまうことの問題性が浮き彫りになってきたためではないかと考える。

わが国におけるケア論は、1990年代後半の介護保険の導入に伴い、「ケア」という用語が使われ始め、介護、医療、看護、教育、心理学の領域で、「ケア」についての議論が開始された。もともとは、日本における「ケア」論は、介護、医療の分野で議論されており、子育てについては、「保育」や「幼児教育」といった別用語で領域別に議論されてきた。つまり、日本における「ケア」論を牽引してきたのは、社会福祉領域、看護領域からの知見や主張だったといえる。

そうした流れに対し、昨今、社会学の領域から、家族に対して女性が行う「ケア」を「不払い

* 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程

本論文は本学院の「課題研究論文」として査読を経て掲載を認められたものである。

労働」として問題視し、それに対する異議申し立てとして、日本における「ケア」論に参入している議論もみられる。その代表的な論者に上野(2003,2008,2011)が挙げられる。福祉や看護の領域における従来の「ケア」論に対し、上野は、「ケア」の領域を「介護」「育児」(2003:286)、「介護」「育児」「障害者介助」(2008:30)と拡張させ、「ケア」の定義を「育児」を含め、用いている。(2011:37-43)。上野が「育児」を含め「ケア」として提示するのは、家族への「介護」「育児」「介助」が、女性の「不払い労働」を前提にしていることの問題性を指摘するため、と理解できる。

上野は、「介護」「育児」「介助」といった「ケア」の担い手が女性に集中してしまっている状況、また、それらの多くが無償労働によって提供されていることを問題視している。善意のもとに無償労働を重ね、たとえ「世のため人のため」になっていたとしても、働く人々の生活が成り立たない状況や、ワーキングプアに陥ってしまう状況は、実際に起きている事実である。「無償労働」の問題が、看過されることはあってはならないし、働く人々の生活が成り立たない状況や、ワーキングプアに陥ってしまう状況は早急に改善されなければならない。

しかし、上野の「ケア」論は、①「ケア」を「負担」と見なす点(2003:266-267, 2008:32, 2011:36)、そう見なすゆえに②「ケア」するもの／されるものの非対称的な関係を貨幣関係において、その対等性を担保し、その関係性に均衡を取ろうとしている点に、筆者は疑問を持つ。②に対する筆者の疑問は、稲沢(2002:191)の議論に根拠をおいている。稲沢は、「支援する—される」の非対称性は、(その困難から)「逃げられない者」と「逃げられる者」との間の不均衡であると説明し、その関係性を「逃げられない者」と「逃げない者」との新たな関係性におきかえるべきだと主張している。お互いが「逃げない」ということを共有している限りにおいては、その非対称性は、対称性として書き換え可能となるだろう。

上野は、「ケアする—される」の非対称性を解決するためには、貨幣関係によって、その均衡が保たれると説明するが(2011:183)、「ケアする—される」の非対称性の解決は労働力商品の売買だけでは説明できないだろう¹。その論拠として、パットナム(2001:213)の「一般的互酬性」の議論がある。「一般的互酬性」とは、「ある時点では一方的あるいは均衡を欠くとしても、今与えられた便益は将来には返礼される必要があるという、相互期待を伴う交換の持続的關係²」のことだが、パットナムによれば、一般的互酬性のシステムにおける個人は、すぐにその場で返礼の回収ができなくとも、いつか返礼がまわってくるかもしれないという期待のもと、利他的な振る舞いをするという。ケアについて検討する際にも、ケアする者とされる者とのあいだの「互酬性」(reciprocity)の視点を含めて考える必要があるだろう。

筆者の問題関心は、子育て支援における親の主体性はどのような条件のもとで発揮されるのかにあるため、「子育てにおける互酬性(reciprocity)」について、その互酬性の実態化された構造をみることで、支援する／される(「ケア」する／される)の問題を考えてゆきたい。

2. 先行研究, 課題と方法, 対象, 分析枠組み

2-1 先行研究整理

「子育てにおける互酬性(reciprocity)」を「支えあいの子育て」として議論している研究に小出まみ(1999, 2000)の研究がある。小出は、日本の子育てにおける本質的な問題を「孤立した

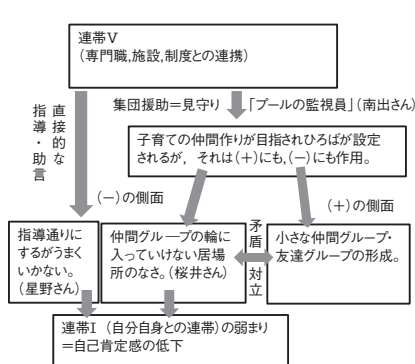
子育て」としたうえで、その解決策を「支えあいの子育て」に求めた。カナダでの先進的な事例分析をとし、小出は「支えあい・助けあいの3つのレベル」として、「①当事者同士の仲間づくり、自助グループ」、「②見守り、手を貸すボランティア、先輩の存在」、「③子どもを育てやすい環境、制度、地域社会に作りかえる」の3つのレベルが親には必要なことを示した。

小出は、親の自己肯定感の低さの問題や自己の存在意義の問題を、著書のなかでは言及しているものの、「支えあい・助けあいの3つのレベル」には入れなかったため、拙稿(2012, 2013)で、親の自己肯定感の問題を組み入れた枠組みを提示した。小出の「子育てにおける支えあいの3つのレベル」と拙稿(2012, 2013)の子育てにおける連帯5層の対照を【表1】に示す。

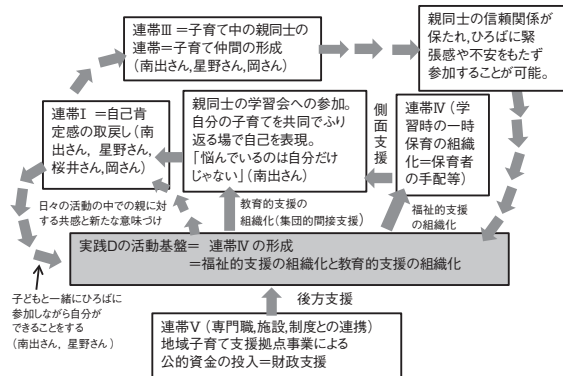
【表1】小出の「子育てにおける支えあいの3つのレベル」と拙稿(2012, 2013)の連帯5層の対照表

誰(何)との連帯か?	小出(1999,2000)の「子育てにおける支えあい・助けあいの3つのレベル」	拙稿(2012,2013)の子育てにおける5つの連帯論
自分との		連帯Ⅰ＝自分自身との連帯＝自己肯定感・自尊心の回復、 自分自身を価値のある尊厳ある存在として扱う。
パートナーとの		連帯Ⅱ＝個別家庭内でのパートナーとの連帯
当事者同士の	①当事者同士の仲間づくり・育児サークル・自助グループ	連帯Ⅲ＝子育て中の親同士の連帯
先輩・地域住民との	②見守り、手を貸すボランティア、先輩の存在	連帯Ⅳ＝先輩親、地域住民、ボランティアとの連帯
専門職・施設・制度との	③専門の施設と職員、子育てしやすい環境、制度、地域社会に作りかえる	連帯Ⅴ＝専門職、施設、制度との連携

拙稿(2012)では、子育て問題を上に示した「5つの連帯」の欠如として捉え、親が孤立状態から解放されるには、5つの連帯がトータルで現実のものとなることの必要性を論じた。また、拙稿(2013)では、「5つの連帯」の枠組みを用いて、A県B市の「地域子育て支援拠点事業」に2011年に選定された実践Dの事例をとりあげた。3人の親たちの聞き取り調査の結果から、実践Dと同じ中学校区にあるB市直営の地域子育て支援拠点F(以下支援拠点F)に3人が参加した経験があったこと、そして支援拠点Fでは、3人ともネガティブな経験をしていたことが分かったため、支援拠点Fと実践Dの構造分析を試みた。分析からは、3人の親に限定すれば、支援拠点Fは非循環の支援構造を、実践Dは循環する支援構造を有していることが分かった³。



【図1】3人の親たちの聞き取り調査から見える
支援拠点Fの支援構造(非循環構造)



【図2】3人の親たちの聞き取り調査から見える
実践Dの支援構造(循環構造)

拙稿(2013)からは、親の自己肯定感を低下／向上させる支援の違いは、非循環構造か循環構造かの違いであると考えられ、また、小出のいう「支えあいの子育て」とは、「循環構造を有する支援」だと考えられるが、では、循環構造を必ずしも有していない支援実践が、親の自己肯定感を高めるような支援へと、その支援のあり方を変化させるには何が必要となるのか。この問いに答えることによって、支援実践における「支援する／される」の非対称性の問題、支援実践における親のディスエンパワメントに対する問題整理の一助になればと考える。

2-2 課題の限定と方法, 調査対象, 研究上の倫理的配慮

そこで、本論の課題は、初期段階において必ずしも循環構造を有していない支援実践が支援のあり方を変え、循環構造を有するようになってゆく論理を、A県B市において地域子育て支援拠点事業を受託している実践Dに即して解明することに限定する。このように課題を設定するのは、子育て支援実践において、支援／被支援という一方的な関係が更新され、子育てにおける親の主体性が保障され、親が自己肯定感を高めていくことが可能となるような支援は、どのような条件のもとで可能となるのかが明らかにされたいと考えるためである。

筆者は、実践Dのスタッフと参加者に対し、2010年7月から2012年1月にかけて半構造化インタビューを実施し、追加調査を2013年6月～9月に行った。本論では、この調査で得られたデータのほか、実践Dのフィールドで得られたデータも併用する。筆者は2010年9月からアクションリサーチの手法でフィールドに入り、研究を進めてきた。2010年度はひろばボランティアとして、2011年度からはひろばスタッフ及び乳幼児の親の学習実践の進行役として実践に関わり、現在も、ひろばスタッフとして実践に関わっている。こうして得られたデータをもとに、上記の課題を明らかにしたい。調査協力者を【表2】【表3】にまとめた。

研究上の倫理的配慮については、データ引用にあたり、本論で扱う地名、支援施設名、実践名、人物名には、特定することができないよう仮名を用いた。また、調査協力者15名全員に、本論を提示し、聞き取り調査で得られたデータを使用させて頂くことの承諾を得た。

【表2】 聞き取り調査(参加者)の協力者一覧(名前は全て仮名)

名前(年代)性別	子ども	初めて参加した時期	実践Dへの関わり方	聞き取り調査でのコメント
南出さん(30代)女性	幼稚園児・未就園児	2010年度	2010年度から乳幼児の親として実践Dに参加。「乳幼児の親の学習実践」や、ひろばに参加。前職で福祉関係に勤務していた立場から、実践Dの課題やスタッフの支援のスタイルについての意見やアイデアを出す関わり方をしている。	1歳すぎから2歳にかけての「玩具のとりあい」について、以前はただその場を収めるために子どもに注意していたが、実践Dのひろばで増えんが子どもと関わっている様子を見て、実践Dに来ると親も子も学べる場所となっていることがわかり、そのことが「すごい」と思い、それをスタッフに伝えた。
岡さん(30代)女性	幼稚園児・未就園児(乳児)	2011年度	2011年度の「乳幼児の親の学習実践」に参加。上の子が幼稚園にあがったあと、下の子(乳児)を連れて実践Dに参加している。	「なぜ、他の子を見るのか?」の問いに対して)多分、やっぱり、自分が増えんなどにしてもらったからだと思う。自分がトイレに行くときも、支援拠点Fだと子どもを連れていき、実践Dだと周りにいる人に頼む。支援拠点Fだと「他の子」(自分の子ども以外の子)に触れるのにも、遠慮がある。でも実践Dだと、他の子を見るのが「普通」。自分の子どもと客観的にないときがあるが、他の子どもと「無責任に」かわい。他の子に対しては、気持ちに余裕がある。ちょうどよい距離感。
伴さん(30代)女性	未就園児	2012年度	2012年に子どもが生後2ヶ月のころから、実践Dに参加している。2012年度の「乳幼児の親の学習実践」に参加。未就園児の子どもと保護者が集う「赤ちゃんひろば」などに、子どもをつれて頻りに参加している。	「なぜ、他の子を見るのか?」と問われると、「気がついたらしていた」「それが当たり前から」。支援拠点Fだと、その子のお母さんに「遠慮」がある。(他の子を見るのは)無意識にやっていた。実践Dだからやっていた。義務だと思っていたら楽しくないけど、気負っていないから楽しい。他の子に読み聞かせしたり、他の子を見るのが楽しい。
梶さん(30代)女性	未就園児・未就園児(乳児)	2011年度	2011年度に上の子をつれて実践Dに参加。その後、下の子の出産を経て、二人の子どもと実践Dに参加している。2013年度の「乳幼児の親の学習実践」に参加した。	(他の子を見ることについて)多分、みんなの真似をしているんだと思う。他のママたちとかスタッフから、「何かいいなあ」と思っているところを真似している。自分がされて嬉しかったこととか、「こういう時にこういうことをしてもらって有り難かった」という経験を覚えていて、そういう場面を真似しているんだと思う。でもそれを意図的にしているわけじゃない。できれば、支援拠点Fでも他の子を見たいんだけど、遠慮があってできない。(他の子どもをみたいのはなぜ?という問いに対して)「だって、かわいいんだもん」
藤さん(30代)女性	未就園児	2011年度	2011年度から子どもをつれて実践Dに遊びに来ている。2012年度の「乳幼児の親の学習実践」に参加。	支援拠点Fでは、トイレとか車の移動とかのちょっとした時間でも、先生からは子どもを見てもらうのは「ちょっとだめです」と、お母さんが子どもと一緒にいないと「危ないのを見てて下さい」と言われる。(実践Dで他の子を見るのは)自分の子どもと近づきすぎるので、子どもに対する見方も変わってしまう。他の子どもだと優しくなる。

【表3】聞き取り調査(スタッフ)の協力者一覧(名前は全て仮名)

名前(年代)性別, 2013年の子どもの成長段階	現在もしくは過去の役割	実践Dでの関わり方の変化	実践への参加動機, 関わり方の変化となった出来事等	実践Dに至る前の職業
堤さん(40代) 女性 子ども: 中学生, 小学生	代表 (現・スタッフ)	2006年度=将来構想委員 2007年度=事務局スタッフ・運営委員 2008年度=ひろば責任者・運営委員 2009年度=ひろば責任者・運営委員 2010年度=構想部リーダー・運営委員 2011年度=ひろば責任者・運営委員 2012年度=ひろばスタッフ兼実践D代表 2013年度=ひろばスタッフ兼実践D代表	2004年から2006年まで, B市内にある, 障がいのある人もない人も, 赤ちゃんからお年寄りまでの誰もが自由に参加できる「協同実践Z」のスタッフとして, 実践に関わったのち, 実践Dの立ち上げから関わる。2007年は事務局スタッフ, 2008年, 2009年はひろば責任者として関わったのち, 2010年に構想部に異動。2011年にひろば責任者を兼務したのち, 代表となる。	看護職/協同実践Zのボランティアスタッフ
湊さん(50代) 女性	副代表 (現・スタッフ)	2005年度=E幼稚園教諭・将来構想委員 2006年度=E幼稚園教諭・将来構想委員 2007年度=E幼稚園教諭・運営委員 2008年度=事務局スタッフ・運営委員 2009年度=事務局リーダー・運営委員 2010年度=ひろば責任者・運営委員 2011年度=ひろば責任者・運営委員 2012年度=ひろば責任者兼副代表 2013年度=ひろば責任者兼副代表	立ち上げ準備期から, E幼稚園の教諭として将来構想委員会に参加し, 実践Dに関わる。2007年度にE幼稚園を退職したのち, 実践Dのひろばスタッフとして実践Dに関わる。特に, 2010年度は, ひろば責任者の担当に決まっていた澤さんを, 堺さんとともにバックアップし, ひろば責任者三人体制をとった。月～木は別の仕事に従事しながら, 金曜日のひろば責任者として, 実践Dに関わっている。	一般企業/小学校教諭/E幼稚園教諭
浜さん(40代) 女性 子ども: 小学生, 小学生	元事務局スタッフ (元・スタッフ)	2007年度=ひろば参加者 2008年度=医療的ケアボラ, 事務局 2009年度=事務局, 赤ちゃんひろば担当 2010年度=事務局, 赤ちゃんひろば担当 2011年度=不定期ボラ, イベントボラ	2007年度はひろば参加者として関わる。2008年度, 堤さんが医療的ケアのできるボランティアを探していたことから, 参加者の医療的ケアにその親と共に携わる。2009～2010年には事務局スタッフ, 自主活動だった赤ちゃんひろばの担当を担う。2011年度は職場復帰したため, 電話やメール等を活用し, 不定期ボラ, イベントボラとして実践Dに携わる。	助産師/母乳育児相談室スタッフ
辻さん(30代) 女性 子ども: 小学生, 小学生	事務局リーダー (現・スタッフ)	2007年度=ひろば参加者 2008年度=ひろば参加者 2009年度=ひろば参加者 2010年度=事務局スタッフ 2011年度=事務局副リーダー 2012年度=事務局副リーダー 2013年度=事務局副リーダー	2007～2009年度は参加者として, 2010年度からは, 事務局スタッフとして関わる。スタッフになったきっかけは, 橋さんの声掛けによる。辻さんいわく「橋さんとの出会いが大きく, 橋さんが自分のもっている力を上手に引き出してくれた」という。2011～2012年度は, リーダーの橋さんと共に, 事務局業務に副リーダーとして携わった。2013年度からは橋さんの後任として, 事務局リーダーとして実践Dに関わっている。	小学校の学習指導員(生徒指導支援員)
峰さん(30代) 女性 子ども: 小学生, 小学生, 乳児	事務局スタッフ (現・スタッフ)	2009年度=事務局ボラ⇒事務局スタッフ 2010年度=事務局スタッフ 2011年度=事務局副リーダー 2012年度=事務局副リーダー 2013年度=事務局副リーダー	2009年に上の子がE幼稚園に入園したとき, 実践Dのボランティア募集の案内をもらい, 実践Dと初めて関わった。事務局スタッフのボランティアとして数か月手伝った後, 当時の会計担当者が転居したため, 後任として会計を引き継いだ。その頃に, 正式にスタッフとなった。2010年度は, 事務局スタッフ, 2011年後半からは, 事務局副リーダーとして実践Dに関わっている。	接客業
堺さん(40代) 女性 子ども: 大学生, 高校生	ひろば責任者 (現・スタッフ)	2009年度=読み聞かせボラ 2010年度=ひろば責任者・運営委員 2011年度=ひろば責任者・運営委員 2012年度=ひろば責任者 2013年度=ひろば責任者	2008年度の末に知人の紹介で, 実践Dを知り, 絵本の読み聞かせボランティアとして実践Dに関わり始める。2009年度末, それまで一人でひろば責任者を担っていた堤さんの構想部への異動が決まり, 澤さんがひろば責任者になることを受けて, 澤さん, 湊さんと共にひろば責任者を担った。拠点事業化以後はスタッフのシフト管理業務を担い, ひろばスタッフのまとめ役をしている。	保育職/手話通訳/小学校の読み聞かせボランティアスタッフ
横さん(40代) 女性 子ども: 成人, 小学生	ひろば責任者 (現・スタッフ)	2009年度=ひろば参加者 2010年度=サロンボランティア 2011年度=サロンリーダー 2012年度=ひろば責任者 2013年度=ひろば責任者	実践Dに関わったきっかけは, 子どもがE幼稚園に入園したことによる。当初は参加者として関わったが, 実践Dで「役割を担う参加者」として関わることを経て, 2010年度はボランティア, 2011年度はスタッフ, 2012年度からはひろば責任者として関わっている。	保育職
澤さん(30代) 女性 子ども: 中学生, 小学生, 小学生	元ひろば責任者 (現・ひろばボラ)	2007年度=ひろばボランティア 2008年度=ひろばリーダー 2009年度=ひろばリーダー 2010年度=ひろば責任者(リーダー兼務) 2011年度=ひろばボランティア 2012年度=ひろばボランティア 2013年度=ひろばボランティア	立ち上げ当初, 上の子どもがE幼稚園に通っていたことから, 下の子どもが0歳児だったことから, 親子の居場所として実践Dに参加した。子連れでも可能なボランティアを募集していたことから, 立ち上げ当時からボランティアとして関わる。2008年, 2009年度は, ひろばリーダーとして, 2010年度はひろば責任者とひろばリーダーを兼務しながら, 実践Dに関わる。2011年度以降はひろばボランティアとして実践Dに関わっている。	一般企業(経理)
堀さん(30代) 女性 子ども: 中学生, 小学生, 幼稚園	元ひろばリーダー (現・参加者)	2008年度=ひろば参加者 2009年度=ひろばボランティア 2010年度=ひろばリーダー 2011年度=ひろば不定期ボラ 2012年度=ひろば参加者 2013年度=ひろば参加者	子どもがE幼稚園に通っていたことがきっかけで, 2008年度から参加者として関わりはじめ, 2009年度は, 子連れでボランティアスタッフ, 2010年度はひろばリーダーとして関わる。2011年度は, ひろばの不定期ボランティアとして, 2012年度以降は参加者として, 実践Dに関わっている。	一般企業(サービス職)
橋さん(40代) 女性 子ども: 中学生, 小学生	元事務局リーダー (元・スタッフ)	2008年度=参加者・運営委員(書記) 2009年度=ひろばボラ・運営委員(書記) 2010年度=事務局リーダー 2011年度=事務局リーダー 2012年度=事務局リーダー	子どもがE幼稚園に通っていたため, 実践Dの準備組織だった将来構想委員会が運営委員会になった後の2008～09年度の運営委員会で書記として関わる。ひろばには, 2008年度は参加者として, 2009年度は子連れでボランティアスタッフとして関わる。2010年度～2012年度は事務局リーダーとして関わる。2013年3月にB市から転出したため, 事務局リーダーを退任した。	一般企業(企画)

2-3 分析枠組み

本論においては二つの分析を行う。第1の分析は、課題共有の分析である。実践上の課題は、誰と誰によって、どのレベルで共有されたのか、また、課題は解決されたのか／されなかったのか、されない場合は何故されなかったのかを分析する。これを第3章で行う。第2の分析は、スタッフの学習分析である。実際に課題解決を行った後、それをどのようにスタッフは把握し、何が次の課題となるのか、実践をどのように意味づけていくのかを分析する。これを第4章で行う。

第1の課題共有の分析にあたっては、「課題の社会化⁵」を念頭におき、これを分節化する。ここでは「課題の社会化」を、「problem setting⁶（課題の設定）」と「problem solving⁷（課題の解決）」の両者を不可分なものとし、個人的に捉えられていた課題が、周囲の人々に分かち持たれていくプロセスとして捉える。従って、「課題の社会化」とは「課題の共有化プロセス」である。それは、①個人が当該現象を課題として捉える「個人の認識レベル」＝「problem setting」レベル、②「個人の認識レベル」の当該現象が、周りの人々に聴き取られ、その課題認識に妥当性が与えられ、共通認識としての課題に発展していくレベル（共通認識としての共有レベル）＝「problem co-setting」レベル、③しかし、課題が共通認識されるだけでは、課題の解決に至らないため、人々が直接的に実践に関与し、具体的に問題解決されるレベル（実践の課題解決にむけた活動の共有レベル）＝「problem co-solving」レベルの、3つに分節化できる⁸。②、③の各レベルで参加者とスタッフが連帯できる条件を探る。

スタッフの学習分析にあたっては、「実践の対象化」を念頭におき、スタッフの子育て観・スタッフの子育て問題認識、スタッフの支援観、支援実践のあり方の変化がどのように生成していくのかを分析する。分析にあたっては、【表1】に示した枠の連帯5層を用いる。

3. 実践Dの概要、ミーティングの設置状況、各時期の課題、小括

本章では、3-1において実践Dの概要を示し、3-2において実践Dにおけるミーティング（以下、MTGとする）の設置状況を提示する⁹。3-3では、MTG設置との関連があると考えられる実践Dの各時期の課題を抽出し、その課題は、誰と誰によって、どのレベルで共有されたのか、どのように解決、または解決されなかったのかについて整理する。3-4ではこの章の小括を行う。

3-1 実践Dの概要

実践Dは、A県B市の学校法人E幼稚園が2005年に組織したE幼稚園将来構想委員会を母体とし、日本基督教団Y教会、E幼稚園保護者会のサポートを受けて、当時E幼稚園のPTA役員だった堤さんと当時E幼稚園の主任教諭だった湊さんが中心となり、2007年6月に立ち上がった任意団体である。E幼稚園は、「人の尊さを共に生きる」を理念とする私立キリスト教会系幼稚園で、B市のキリスト教会系幼稚園のなかでも歴史は長く、1953年に創設された。

B市には99の中学校があり、そのなかでも、実践Dが位置するC中学校区には、約1万4500世帯、約2万6000人が住んでいる（B市住民基本台帳データより推定し算出）。

実践Dは、B市の中心部から5キロほどの場所に位置し、地下鉄やバスの交通の便もよい。実践Dの位置する地域には、徒歩圏内に、中学校、高校がそれぞれ1校ずつあり、上述の支援拠点

Fもある。また、徒歩圏内には公務員住宅があり、転勤によって転入／転出する子育て家庭も多い。実践Dには、年間のべ約5700人（2012年度実績）が参加している。

組織の中心的なメンバーは、E幼稚園に子どもを通わせている親や、E幼稚園と関わりのある親、子育てから手が離れた元保育士や地域住民などである。活動は、園児の降園後のE幼稚園の園庭とホール、E幼稚園に隣接する建物の2階部分を拠点とし、行われている。

事業は、参加者や賛助会員による賛助金、教会清掃による教会からの委託金、バザーやイベントによる売上金の一部の協賛金、B市からの地域子育て支援拠点事業費（2012年度実績で年間約250万円）を含め、年間約370万円の収入によって運営されている。

実践Dが立ち上がった経緯および、E幼稚園将来構想委員会の議論については、【表4】にまとめた。将来構想委員会の議論では、親が孤立したままで子育てをすることの弊害、またそうした状況のなかで、子どもたちが育っていくことが問題として把握されており、子育て家庭の孤立化の問題を解決するための実践として立ち上がったことがみてとれる。

【表4】将来構想委員会での議論の概要

2005年春	E幼稚園では、親も子どもも地域社会の多様な人々との関わりの中で生活することが難しくなってきたこと、午後保育は行えない幼稚園機能の限界がクローズアップされ、子ども達の健やかな成長に対する危機意識が教諭間で芽生え始めた。今後も地域の幼児教育機関として存続していくためにも、どのようなことが幼稚園に求められているのかを検証するために在園児の親に降園後の子どもの生活に関するアンケートをとり、親の意見を把握した。アンケート結果からは「預かり保育ではなく子ども達が安心して遊べる居場所がほしい」「遊ぶ人がいない」「横だけの関係」「母子カプセル」等、子育て家庭が孤立している問題が浮かび上がった。
2005年夏～2006年秋	上記のアンケートを踏まえて、E幼稚園内に、幼稚園理事・教会・PTA役員・幼稚園教諭で構成される、「将来構想委員会」が設立された。将来構想委員会は2005年夏に立ち上がり、2006年秋までに7回の委員会が持たれた。委員会では、幼稚園と教会が母体となり、幼稚園教諭が主体となるのではなく、親たちが主体となって運営する「ひろば」が模索された。さらに、幼稚園の理念に基づき、「E幼稚園らしさとは何か」が整理された。E幼稚園らしさとは、子どもひとりひとりが尊厳を持つ存在として尊重され、子どもたちが安らぎを感じながら育っていけること、そのための自由な集いの場、遊ぶことができる環境が提供されること等が確認された。そうした「場づくり」のためには、園に関わる親たちの潜在的な力を借りていくこと等が確認された。具体的にひろばづくりを誰が担っていくのかについては、B市内で先進的な取り組みをしている「協同実践Z」と「子どもの家W」の取り組みから学んだ。第7回の委員会では、「赤ちゃんからお年寄りまでのみんなの居場所」として、心のバリアフリーを目指す取り組みをしている「協同実践Z」のスタッフだった堤さん（当時E幼稚園のPTA役員）から「協同実践Z」の取り組み内容が報告された。
2006年秋	上記の「協同実践Z」の活動概要の報告がきっかけとなり、堤さんが将来構想委員となった。実践Dの先行モデルとして、「協同実践Z」の活動ビデオで、「ひろば」の具体的なイメージが教会関係者に紹介され、活動の意義や理念が共有された。「ひろば」が、そこに集う人々にとって、安心できる場、つながりある場、支えあえる場として、機能するためには、地域の様々な人々の手助けが必要なこと、障害を持つ人・持たない人、赤ちゃんからお年寄りの多様な人々の参加によって、「ささえあい」が可能となることが共通に理解され、具体的に「ひろば」には誰が参加するのかのイメージが整理された。
2006年秋～2007年春	具体的に「ひろば」のイメージを共有するために、a)イベントモデル（例：園庭にコンロを出し、親の手を借りながら、焼いた食材と一緒に食べる試み）、b)自主活動グループモデル（親たちが自主的にテーマを出し、そのテーマに沿ってグループで活動するとりくみ、障害者児の理解を深める活動など）、c)運営資金獲得モデル（バザー等で手作り品、不要品を売る取組）を実際に行い、それらのモデルを活用して、幼稚園保護者に「ひろば」構想を説明し、保護者のなかでも、特に興味関心のある人に向けたミーティングを開催した。更に教会員に「ひろば構想」を説明し、賛同を得た。
2007年春	教会役員・幼稚園役員から構成されるE幼稚園理事会で「実践D」が立ち上がるのが正式に決定した。承認後、将来構想委員会は運営委員会に移行した。

【表5】実践Dの時期区分

年度	摘要	時期区分
2007年度	リーダー層による「居場所づくり」の模索	模索期
2008年度	前年度の課題を踏まえた組織・体制づくり	発展期
2009年度	参加者からボランティアスタッフへの人材育成に焦点化	充実期
2010年度	事務局主導によるチームの体制づくりとひろば設定の減少（実質的な規模縮小）	苦惱期
2011年度	地域子育て支援拠点事業の受託に伴う組織・事業の見直し（それに伴う会議回数の増加）	変革期
2012年度	スタッフの有償化とシフト制導入 ひろばスタッフミーティングとスタッフ研修の定例化	探究期

実践Dのミッション（使命）：
実践Dは、子どもが人との関わりの中で希望を持って育つ地域をつくります。

バリュー（価値観）：
違いを認め合い、ありのままを受け止めあおう。
弱さがあるからつながれる。つながることを喜ぼう。

ビジョン（こころざし）：
私たちの今の命が未来の命につながっていくことを夢見て、
実践Dはこのような歩んでいきたいとおもいます。
10年後、6年後、3年後…
10年後
実践Dは、訪ねてきた方の多様な過ごし方を可能にする機能をあわせもったコミュニティになっています。

6年後
実践Dはここに关わる人の就労もを支える場になっています。

3年後
実践Dは地域に住む人がよく訪ねてくる多世代の人々が集える場所になっています。

【図3】実践Dの理念（2012年春作成）

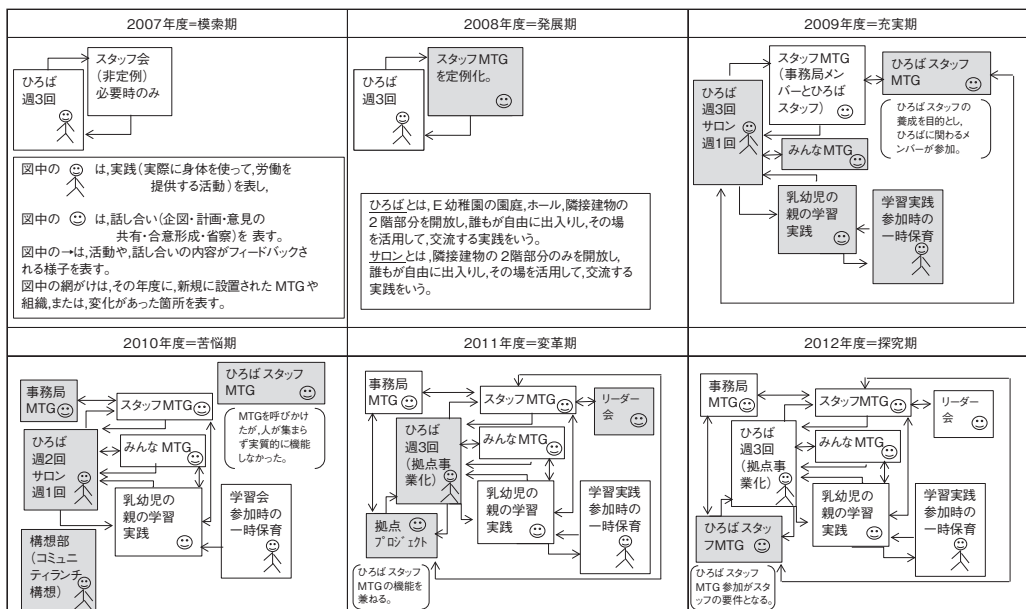
また、将来構想委員会の議論においては、親たちの望む実践が、幼稚園の単なる預かり保育でも、園庭開放でもないことをうけ、E幼稚園とY教会は、親が主体となって関われるグループを側面支援しようということが確認された。2006年度の立ち上げ準備活動の中心的な役割を担ったのは、2004年から2006年に協同実践Zでスタッフとして経験を積んだ堤さんだった。

協同実践Zは、1995年に設立された任意団体である。バリアフリー公園の向かいにある個人宅を拠点とし、障がいのある人もない人も、赤ちゃんからお年寄りまでの誰もが自由に、思い思いに過ごせる、交流の場を提供してきた。協同実践Zでは「その日参加した人みんながスタッフ」であり、ひろばで出会った人どうし、「挨拶をすること」をモットーにしている。

実践Dは、同じB市で先進的な取り組みをしている協同実践Zでのひろばづくりを先行モデルとし、協同実践Zが大切にしている「助けあい」「支えあい」「ふれあい」を機軸に、実践Dのスタイルを作り上げていった。

3-2 実践DにおけるMTGの設置状況

実践Dにおけるひろば実践と、実践Dの企画・計画・意見の共有・合意形成・省察が行われるMTGが、どの時期に設置されたのかを確認するため、その状況を【図4】に整理した。



【図4】 実践Dの各時期におけるMTGの設置状況

【図4】からは、期を重ねるごとに、目的の異なるMTGが設置されてきていることが見てとれる。2008年度には、スタッフ同士が実践の企画、計画、意見の共有、合意形成、省察を行う「スタッフMTG」が新たに設置され、2009年度には、乳幼児の親同士が自分の子育ての悩みを自由に語りあう「乳幼児の親の学習実践」が開始された。また、「乳幼児の親の学習実践」を開催するにあたっては、親が学習をしているあいだの一時保育も同年、新しく組織化された。また2009年度年には、ひろばを週3回開催することに加え、隣接建物の2階部分のみを開放し、自由な交流を行う「サロン」も新たに設置され、ひろば実践が活発化した。

2010年度は、既存スタッフの入れ替えがあったことから、ひろばを週2回、サロンを1回行うこととし、実質的な規模の縮小がなされた。また、同年には事務局主導の体制となったため、事務局MTGが新たに設置された。2011年度には、B市で地域子育て支援拠点事業が実施されることをうけて、「拠点プロジェクト」と「リーダー会」が新たに設置された。また、2011年10月より実践Dは、B市の地域子育て支援拠点として、拠点事業を委託されたことをうけ、ひろばは「拠点事業」としてリニューアルすることとなった。2012年には、拠点事業化に伴い、ひろばスタッフの要件として「ひろばスタッフMTG」への参加が求められるようになった。

MTG設置にあたっては、各時期に生じる実践上の課題や、実践に関わる人々が必要だと考える要素との関連があるため、次の節ではそれを整理していく。

3-3 実践Dにおける各時期の課題

(1) 前半期(2007年度＝模索期, 2008年度＝発展期, 2009年度＝充実期)の経過

①スタッフ間のコミュニケーション不足により「ひろばの課題」を共有できない状況

実践Dは2006年度の立ち上げ準備を経て、2007年6月に活動が開始された。堤さんは、ひろば開設時間帯に家を空けることが出来なかったため、ひろば責任者に就くことはできず、湊さんがE幼稚園関係者を中心にスタッフ募集の声をかけ、保育士資格を持つ東さん(仮名)と、元E幼稚園教諭だった谷さん(仮名)がひろば責任者(コーディネイター)に就任した。堤さんは事務局を担当したが、スタッフ会は非定例であったため、事務局とひろば責任者間の連絡・調整は難航し、東さんと谷さんは2007年度末に、ひろば責任者を辞任した。その時の様子を、堤さんは、以下のように語っている。

コミュニケーション不足だね。今みたいに定例のミーティングがなかったの。「月に1回、ミーティングをしよう！」っていう決まりがなかったのね。だから何かあったときに、「集まる」っていう感じだったし、事務局とコーディネイターが、頻繁に会う機会もなかったわけよ。会議をするわけでもないでしょ？で、時間帯は合わないでしょ？

(2011年5月30日・堤さんへの聞き取り調査より)(エピソード1)

また、2007年度のひろばの問題点を堤さんは、以下のように語っている。

やっぱり、「親支援」というよりも、「子ども支援」だったんだよね。(略)だから、親に対してちょっと、「厳しい」こともあったの。「もうちょっと、(子どもを)ちゃんと見てて！」って感じだね。「お母さん、ちゃんと見てて！」って感じ。だから、ひとつ、参加者の人から、あたしの方にクレームが来てたのは、子ども二人と来てるその人がいうのには、「ひろばに行くより、園庭開放に行く方がずっと、気が楽だ！」って言われたの。「どうして？」って言ったらね、「子どもが二人いる」と。「だけだね、ああやって、『お母さん、ちゃんと見ててね！』『見ててね！』っていうふうに言われると、二人いると、ひとりひとり、違う場所にいくじゃない？で、ひとは砂場にいたい。ひとは、建物のなかに行きたい！って言ったらね、自分ではもう、どうしていいかわからない」んだって。だからね、「(実践D)のひろばにいるよりも、園庭開放にいたほうが、そういうふうなプレッシャーを感じなくて済むから、そのほうが気が楽だ」って言われたことがあるの。

(2011年5月30日・堤さんへの聞き取り調査より)(エピソード2)

エピソード2からは、親子での孤立状態から解放されるためにひろばに参加したにも関わらず、「逆にプレッシャーを感じ」てしまうことが、実践Dの課題として読み取れる。

2007年度末に東さんと谷さんがスタッフを辞任したことを受け、2008年度は、新たなスタッフが加わっていった。その時の様子を、堤さんは、次のようにふり返っている。

2008年の人たち(スタッフ)は、あたし一人だったでしょ？(前年度のスタッフが自分以外に) 誰もいなくなったときに、「あたしのこと助けてあげよう」と思ってくれた人たちは多かった。

「ひとりじゃできないでしょ。可哀想に」って思ってきてくれた人たち。(略)

(2011年5月30日・堤さんへの聞き取り調査より)(エピソード3)

ここで重要なのは、ひろば実践が「ひとりじゃできない」という指摘である。前年度のスタッフが、堤さん以外「誰もいなくなったとき」、このままひろば実践を続けていくことが不可能なのは明らかである。ひろば実践という「誰にでも開かれている」という意味での「公共的な場」を、「ひとりで担おうとするのは無理だろう」という考えから、堤さんの企図に賛同する人々が新たにスタッフに加わったと考えてよいだろう。

2008年度には、前年度の実践の課題を乗り越える「新しいひろば実践」ができるように組織の「基礎固め」が行われ、スタッフMTGが定例化された。スタッフ同士が「しっかりとコミュニケーション」をとれるような場の雰囲気と「支えあう関係性」が育つような配慮がなされたという。堤さんは、2008年～2009年度にかけてひろばリーダーを担っていた岬さん(仮名)との関係を以下のように振り返っている。

岬がリーダーやっていた時だね。その時に、ある小学生の女の子の話をしてくれたんだけどね、それがちょっと切ない話だったんだ。その時に、岬がそれを私に泣いて報告してくれたの。なんていうのかな、「ああ、こういう仲間っていうか、同志に出会えた」ことがあたしはすごく嬉しかった。その子の切ない話は、まあ、それは置いといたとして、それを、「こうだったんだよ～」って言って、あたしに泣いて、岬が言ってくれたのは、あたしはすごい嬉しかった。「あ、ほんとに、『子どものそばにいる人』ってこういう人だな～」と思って。それをすごく、「同志だな～」と思えてね。それはすごく嬉しかったな～。その時に、何ていうのかな、「同じ」。「同志」っていう気持ちになれたね。「ここは、私が背負っていかなければいけない！」とかっていうんじゃなくて、こうやって、本当に「子どもたちのために、やりたいと思う人たちが、そういう気持ちのひとがここに
いる！」っていうのがすごい、嬉しかった。

(2011年5月30日・堤さんへの聞き取り調査より)(エピソード4)

当初、岬さんは堤さんを支えたいという思いで実践Dに関わったという。エピソード4からは、実践に関わってからの岬さんの変化が見て取れる。岬さんの実践Dへの関わり方は、堤さんの友人として関わるという姿勢から、「子どものそばにいる人」として関わりたいという意図に変化したといえるだろう。岬さんと堤さんの関係性は、個人的な友人関係から、実践Dで共に子どもの思いに寄り添いたいと願う、実践Dの活動を媒介とした「同志」の関係へと変化し、共に活動することを通して生まれる信頼関係が生成されていったといえる。

②乳幼児の親の学習実践

実践Dでは、2009年度から毎年、乳幼児の親が集まり、日頃子育てをするなかで感じている思いや悩みを語りあう、乳幼児の親の学習実践が開催されている。名称は、「おしゃべり会」「学習会」と変わっているが、この学習実践の根底には、乳幼児の親自身の自己表現と自己開示が中心に据えられている。実践Dにおいて、この学習実践が組織化されたことによって、乳幼児の親たちは、これに参加し、自分の子育てを共同でふり返り、自分の思いを吐露した。涙ながらに自分の子育てをふり返る参加メンバーを目の前にし、「悩んでいるのは自分だけではない¹⁰⁾」ということ、子育ての問題が個別的な問題ではないことに気が付き、「自分に能力がないから、子育てがうまくいかないのだ」という思いから解放されていった。学習実践終了後も、互いの自宅を往来し、親たちは互いに交流を深め、子どもたちも一緒に遊ぶひとときをもったことが、南出さん、岡さんへの聞き取り調査から確認された。これは、小出のいう「親同士の支えあい」といってよいだろう。

この学習実践を可能にしたのは、親が学習会に参加する際に、子どもを一時的に保育する担い手の組織化である。学習実践は、堤さんをはじめとする堺さん、湊さんらで組織されていたが、一時保育を担ったのは、実践Dの近くに住むボランティアとして登録している地域住民の方たちや、E幼稚園の保護者OB、かつて実践Dに関わっていた近隣住民たちだった。湊さんは親同士が学びあうことの意義を保育者に伝え、協力を得た。学習実践後には必ず、学びの場のスタッフと保育の場のスタッフとが集合し、全員でふり返りの会を行った。学びの場で親が自己肯定感を高めていくこと、保育の場で子どもたちがどんな様子で過ごしているのかが共有された。保育者たちは、学習実践を支えることの意義を理解し、保育に対する意識が変化していったと湊さんは振り返る。その意識変化により、「次の保育が頼みやすくなる」のだという。こうした「担い手・支え手」の組織化が、乳幼児の親同士の学習実践を側面から支えている。実践Dは、担い手・支え手と乳幼児の親とを媒介する役割を果たしていると考えられる。

③「参加者の視点」から実践Dに必要なものをスタッフと共に生み出す

また、2009年に実践Dに初参加した槇さん(仮名)は、当時の様子を、次のように語っている。

最初は、「ヨモギ採り」に参加したんだけど、そのあと、「バリアフリー隊」みたいな感じで、看板作ったりね。看板っていうか、こんな、なんか、小さいプレート。(実践Dに)初めて参加する人にとってもわかりやすいように、「バリアフリー隊」っていうのを、2009年に作ったんだよね。(略) そのあとも、「ちょこちょこ」と。最初は、なんだったかな、でも結構、出ていた(参加していた)んだよね。「流しそうめん」もやった。(略)

参加者として、参加するんだけど、声をかけられやすいから「これ、持って行って～」とか、(流しそうめんを使う)割りばしがなかったら、「割りばし持ってくるかい～？」とかね。

でもさ、「参加者」より、「仕事与えられた」ほうが、居場所ってさ、居やすいんだよね。

(2011年5月20日・槇さんへの聞き取り調査より)(エピソード5)

エピソード5からは、実践の必要が、「参加者」の視点から問い直され、実践Dにとって必要なものが参加者の槇さんとスタッフによって提供されていることがわかる。ここからは、一方的に支援が提供されるのではなく、参加者とともに、実践Dにとって必要なものを生み出そうと

していることが見て取れる。

④地域の様々な課題が持ち込まれるようになる

2007年度の模索の時期を経て、2008年度は組織の基礎を固め、2009年度は乳幼児の親たちのための学習実践を組織し、実践Dの活動は軌道にのった。特に2009年度は、10代、20代の若者、外部からのボランティア数が増加し、参加者からスタッフやボランティアへと実践を担っていく人々の育成をも視野に入れた活動となった。このころから、堤さんは、「実践Dの将来を考えるとようになった」という。実践Dには、障がいを持ちながらも「子どもと関わる仕事がしたい」と願う青年、家族から孤立した状況のなか日常的な会話を求める若者など、乳幼児の親の子育て問題だけでなく、様々な課題が持ち込まれた。解決すべき課題は明らかになる一方で、実践Dの財政規模とこれまでに蓄積されたノウハウだけでは乗り越えられない局面に立たされることとなったため、2010年度は、新たな体制を作り、再スタートを切ることになった。

一方で2009年度末には、これまでひろばリーダーを担っていた中心的なスタッフが家庭の事情、体調変化等により、スタッフを辞任することになり、スタッフの交代もあった。

(2) 後半期(2010年度＝苦惱期、2011年度＝変革期、2012年度＝探究期)の経過

①2010年度のひろば体制

実践Dが将来においても安定的にひろばの実践を行っていくために、「なんとか自分たちの手で自分たちの活動資金を生み出すことはできないか」ということが議論され、2010年度には、外部資金調達の可能性を模索する「構想部」が発足した。堤さんは「構想部」のリーダーとなり、2009年度ひろばリーダーだった澤さん(仮名)、湊さん、堺さんがひろば責任者に、ひろばリーダーに堀さん(仮名)が就任し、ひろばは、彼女たちを中心に運営されることになった¹¹。

2008年度、2009年度は、堤さんを中心としたひろば責任者一人体制がとられ、ひろば責任者を補佐する形で、ひろばリーダーが配置された。澤さんは、2007年の立ち上げ当初からボランティアとして関わり、2008～2009年度は、ひろばリーダーとして、堤さんの補助的な役割を担っていた。

しかし、堤さんの構想部への異動が確定したため、ひろば責任者は不在となり、ひろば責任者の後任問題は、2010年度スタート時の大きな課題となった。後任のひろば責任者として、前年度、ひろばリーダーだった澤さん、仲さん(仮名、2009年度のひろばリーダー)を主軸に「ひろば責任者複数体制」が検討され、堤さん一人でひろばの責任のすべてを担うという体制¹²から、ひろば責任者複数体制が2010年度から試行された。

澤さん、仲さんを主軸にひろば責任者体制が検討されているなか、仲さんも家庭の事情からやむなく実践Dのスタッフを退かなければならなくなり、当初から決定していた澤さんを中心に、湊さん、堺さんの3人責任者体制が形作られた。また、堀さんは「澤さんを助けたい」という意図から、ひろばリーダーに手を挙げ、新体制が発足した。しかし、湊さんは別に仕事をもっていたこと、堺さんも2009年度にはじめて実践Dに関わったため、実践Dでの経験が浅かったこともあり、澤さんと堀さんを主軸としたひろば運営が展開していった。この年度は、それまで堤さんが全面的に中心となっていた体制から、堤さんが現場から離脱しても、ひろば運営が可能となることが試された年度となった。

「とにかくひろばを守ることに専念する」というモットーのもと、2010年度は、当時、未就園

の子どもを育てていた澤さん、堀さんの仕事量を考慮し、2009年度、週3回の開設だったひろばは週2回の開設とし、E幼稚園の園庭とホールを除いた居宅開放（サロン）を週1回行った。しかし、澤さん、堀さんも未就園の子どもを連れながら、スタッフの役割を果たすには限界があり、スタート当初の役割分担が見直され、ひろばの運営や企画等、事務局が担える部分は、全面的に事務局が担うことで、澤さん、堀さんの役割の軽減が図られた。

このため、2010年度からは、事務局がひろばに関する企画・立案を実質的に担うことになり、事務局MTGが新たに発足した。事務局リーダーの橘さん（仮名）は、事務局のスタッフたちに、それぞれが得意とする分野の業務を依頼し、本人たちが必ずしも意識していない力を上手く引きだし、チームとしてのパフォーマンスを向上させる役割を担った。

2010年度の体制は、2008年～2009年度の堤さん主導型のひろばの運営体制が大きく転換されたことを意味する。それまでの「堤さん主導型」の運営体制からの離脱が試みられ、子連れのスタッフや、スタッフ歴の浅いメンバーによって担われる等、スタッフ自身の様々な背景や、事情が加味されながら、スタッフの個々の生活状況との折り合いがつくような、「それぞれの働き方」が模索されていった。

②みんなMTG

ここで、「みんなMTG」にふれておく。「みんなMTG」とは、実践Dに集う参加者も話し合いに入り、ひろばのあり方をざっくばらんに語り合う会である。呼称に変遷はあったが、この「参加者を交えたMTG」は2007年度当初から存在していた。しかし、その実態は、実践の立ち上げ当時は、ひろばを開設することに手一杯の状況で、MTGにまでは手が回らず、「参加者の声に耳を傾ける」という機能を果たすのは、2009年度以降のことだった¹³。

2010年度は、実践Dの限界が発見される一方で、解決策をなかなか見出だすことができない一年となった。澤さん、堀さんら中心的な担い手たちの試行錯誤が続いた。

そのため、澤さん、堀さんを支える立場にいた湊さんが中心となり、「参加者からの意見を実践に生かす」という実践Dの当初の姿勢に立ちかえり、「みんなMTG」が開催されている。「みんなMTG」は年度末の2～3月にかけて、年1回程度、実施されているが、何か問題が起こったときには、「参加者の声に耳を傾ける」という実践の基本に立ち返り、そこに問題解決の糸口を探ったという。

③参加者からみた「ひろば」の課題

子どもの海ちゃん（仮名・当時1歳）と「ひろば」に参加した南出さん（仮名）は、2010年度当時の「ひろば」の様子を、以下のように語っている。

でも、ある日「ひろば」の時間に「えい！」って行ってみたの。そしたら、やっぱり、赤ちゃんがいなくて。その時、「赤ちゃんがいなかった」。うん。幼稚園児か、ちょっと、大きいかな。3～4歳くらい。いつもの「ひろば」のメンバーっていう感じの人しかなくて、赤ちゃんがいなかったのね。で、そこ（入口）から、入ったんだけど、誰に声かけていいか分かんなくて、それが、最初、困った。で、「やっぱり、来ちゃいけないのかな？」ってその時、思った。なんか、ほら、みんな、知っている感じで、来ている人同士がね。最初に入ってきてても、なんか、遊び方もよく分かんないし、だから、その時、一応、遊ばせたんだけど、やっぱり、「海には、まだ、早かったのかな

～？」っていうのと、やっぱり、ちょっと、何だろう、「知っている人しか来れないのかな？」みたいな感じ。なんだろう、「入っていきづらい」感じだった。(略)

ここは、来たらどうすれはいいのかが分かんないし、来ても、よく言えば「自由」だけど、悪くいうと「ほったらかし」。その時はね、最初、困って、しかも、誰がスタッフかも分かんなくて、で、一番最初、自分からスタッフに声をかけた。「はじめて来たんですけど～」みたいな感じで、言って、これに、ほら、「名簿に書いてください」みたいに言われて、なんか、でもあとは、「じゃあ、自由に」みたいな感じだったから。まあ、「そういう感じなのかな～？」って。

(2011年7月28日・南出さんへの聞き取り調査より)(エピソード6)

エピソード6は、2010年度の春の様子だが、参加者である南出さんが感じた「ひろば」の課題は、すぐに開示されたわけではなく、2010年度が終わる2月に、南出さんは、堤さんに「ひろばをもっとよくするにはどうしたらよいか」と問われ、以下のように語ったという。

(実践Dに)一人で行くには勇気がいる。それから、「みなさん、大歓迎です！」って言われても、具体的に自分がそれに該当することがわからないと、(参加者としては)行きづらい。「みんなって誰？」って思ってしまう。例えば「乳幼児の親が対象です」って言われると、「ああ、行ってもいいんだ～」と安心する。

参加している人同士が、仲がいいだけに、「入りづらい」「常連さんしか来てない」ように感じてしまう。初めて来る人には、困ったとき、誰に頼っていいかわからないから、スタッフとボランティアは名札をつけて、参加者と区別できるように目印をつけてほしい。

あとは、「転勤族、集まれ！」とかっていうポスターを張ったり、小さい子って何歳から何歳までなのかをわかりやすく具体的に書いてほしい。あと、イベント等で、(実践D)の敷居を低くすることが大事。

(2011年2月19日・実践Dフィードノーツより)(エピソード7)

南出さんの発案により、スタッフの顔と名前が一致するようなマグネット板が作成された。またスタッフと参加者の区別がつくように、参加者にはスタッフとは色の異なるテープに名前を書いてもらう等の工夫がなされた。エピソード7からは、「ひろば」をよりよいものにするための南出さんからのアイデアが提供されていることがみてとれる。

④子育て支援の「先輩団体」とのつながりと地域子育て支援拠点事業の受託

2010年12月には、B市の市長と、B市で先進的な子育て支援の取組をしている団体の代表とスタッフが、子育て支援についての話し合いの場を持った。話し合いの場を設定したのは、B市で実践Dよりも古くから子育て支援実践に携わっている民間の団体だったが、その話し合いの場に堤さんも参加し、実践Dの活動をアピールしたという。団体の代表らは、B市の市長に、B市においても「地域子育て支援拠点事業」の導入を早期に進めて欲しい旨を申し入れたという¹⁴。B市の市長は、中学校区に1か所の子育て支援拠点を開設することを選挙公約にあげていたことから、これをもとにまちづくり計画が推進されることとなった¹⁵。

このことが契機となり、2011年10月からは、B市においても地域子育て支援拠点事業が開始されることになり、実践DはB市の地域子育て支援拠点に選定され、事業委託費として、実践D

はB市と国からの財政支援（費用負担は各1/2）を受けることとなった¹⁶。

地域子育て支援拠点事業を受託することについては、正式決定する以前に、実践Dのなかで、「拠点プロジェクト」が立ち上げられ、拠点事業を受託した場合に想定される課題が検討され、拠点プロジェクトは、拠点事業を正式に受託したのちも、実践Dの未来を模索する話し合いの場として機能し、その場では、将来のビジョンや実践Dの理念などが話し合われた。

拠点事業が本格化した2012年度は、ひろばの終了後に毎回、その日の実践をふり返る場が設けられ、その日の活動で、特に対応に苦慮したこと等がスタッフの間で共有された。

また、「ひろばスタッフMTG」が定例化し、ひろばスタッフは原則、出席が義務づけられ、ひろばスタッフとして、どんな力を発揮すべきなのかが、実際の事例とともに検討された。例えば「あの場ではこんな対応をしたが、本当にあの対応でよかったのだろうか¹⁷」といったスタッフの戸惑いや、判断に悩む内容などが共有された。それは、「今までのやり方が通用しない」場面との遭遇であり、にもかかわらず「既存のやり方しか思いつかなかった」スタッフが自らの「限界を知る」局面である。以上が、各MTG設置が必然となる実践Dの展開過程である。

ここまでの内容を含む実践Dの課題を、【表6】に整理した。実践Dが各時期に直面した具体的な課題としてaからqまでの記号を付し【表6】の左側に整理し、右側では、各時期の具体的な課題が、それぞれ誰と誰によって、どのレベル¹⁸で共有されたのかを整理した。

【表6】 実践Dにおける各時期の課題と課題の共有化プロセス

年度	符号	客観的な課題 (その時点での課題は何だったのか?)	それぞれの課題は、誰と誰によってどのレベル(①「個人の認識レベル」＝「problem setting」レベル、②「共通認識としての共有レベル」＝「problem co-setting」レベル、③「実践の課題解決にむけた活動の共有レベル」＝「problem co-solving」レベル)で共有されたのか?	誰からの誰への課題提起だったのか?	共有化のプロセス
2007年度 ＝模索期	a	・スタッフ間のコミュニケーション不足(エピソード1)・ひろば責任者と事務局間の連絡・調整の難しさ	・スタッフ間のコミュニケーション不足、連絡、調整の問題は、①のレベルにとどまった。	スタッフ	①
	b	・「お母さん、子どもをちゃんとみてて!」とスタッフに言われ、参加者にとってひろば参加がプレッシャーになったこと(エピソード2)	・後日、ひろば参加者と堤さんの間で、①、②のレベルで課題が共有された。	参加者⇒スタッフ	①⇒②
	c	・エピソード2に見られるようなひろば参加者の「困り感」がスタッフの間で共有されていないこと。	・ひろば参加者の葛藤は、この時点では、スタッフ間で共有されなかった。	スタッフ	①
2008年度 ＝発展期	d	・堤さん以外のスタッフが辞任し、堤さんひとりでは実践を担うのには限界があるということ。(エピソード3)	・実践Dの取り組みは、公共的な取り組みであるにもかかわらず、2007年度末に確定している担い手が堤さん一人しかいなかった。ひとりでは実践Dが成立しないことは明らかだったため、実践Dに参加している親、ボランティアの人々がスタッフとなり、③の活動の共有のレベルで、この課題が分かち合われた。	スタッフ⇒スタッフ、ボランティア、参加者	①⇒②⇒③
	e	・ハード面の整備(本棚、ベランダ、看板、テーブル、椅子等の設置)	・みんなで使用する本棚、ベランダ、テーブル等の設置に関しては、大工仕事の得意な地域住民の手を借りて、環境の整備がすすめられた。①実践Dにはこういった備品が必要だという声⇒②みんなにとってもそれは同様に必要なもの⇒③必要なものを自分たちで作ったり、家庭で不要となったものを持ち込んだ。①、②、③の3つのレベルで、この課題が分かち合われた。	スタッフ⇒スタッフ、ボランティア、参加者	①⇒②⇒③
2009年度 ＝充実期	f	・乳幼児の親にとって、子育てをしていくうえでは、親自身の自己肯定感を回復する必要があるということ。	・親の自己肯定感の回復のためには、親同士が本音で話し合え、親には、自分自身を責めることから解放されるような学習実践が必要であることを、堤さんは、自身の学習実践の経験から、認識していた。しかし、実践Dの立ち上げ期(2007～2008年度)においては、ひろば実践を軌道に乗せることが実践上の優先課題であったため、学習実践の組織化の着手は2009年度の課題となった。堤さんとスタッフの間で①、②のレベルでこの課題が分かち合われた。	スタッフ⇒スタッフ	①⇒②
	g	・乳幼児の親の自己肯定感を高めるような親同士の学習実践を実践Dでも行いたいと企図したとき、親の学習時の一時保育はスタッフだけでは限界があるということ。	・乳幼児の親同士の学習実践は、親にとってだけでなく、結果的には子どもにとっても有益であることが、スタッフ・一時保育者の間で共通に理解され、地域住民、先輩親たちの手を借りて、③の活動の共有レベルで一時保育の課題が共有された。	スタッフ⇒スタッフ、ボランティア	①⇒②⇒③

2009年度 ＝充実期	h	・乳幼児の親にとって、ひとりで子育てをする ことは、辛く、大変だということ。	・「乳幼児の親の学習実践」で親同士が語り合うなかで、 「悩んでいるのは自分だけではない」ということに気づき、参 加した親のあいだに「話し合える」関係性が生まれた。この 課題に対しては、①の個人の認識レベルを経て、②の共通 認識のレベルで共有された。	参加者⇒参加者	①⇒②
	i	・実践Dに、初めて参加する人にとっては、ど こに何があるのか分かりづらいということ。 (エピソード5)	・初めて参加する人にも、「バリアフリー」の状態で実践Dを 使ってもらえることが必要だ(①横さん個人の認識)という、 参加者の横さんの意見が取り入れられ(②のレベル)、「バ リアフリー隊」が結成され、横さんもその活動を担った。(③の 活動共有のレベルにおいても、この課題が分かち合われた。)	参加者⇒スタッフ	①⇒②⇒③
	j	・エピソード5にみられるように、実践Dの内部 からでは分からない実践Dの課題について、 参加者、ボランティア、スタッフという立場を超 えて、みんなが対等な立場で実践Dの現在の 問題点について話し合い、考えあう場が必要 だということ。	・実践Dの課題を、みんなで話しあうことが企画され、「みんな MTG」と命名され、この話し合いが持たれた。参加者、ボラン ティア、スタッフが一堂に会し、実践Dの現在の問題点を深 め、できることから改善が図られた。具体的には、「床が滑り やすい」といったような、実践Dの使い勝手に関する議論が 多かったが、参加者からの問題提起に意味があり、①参加 者の認識が、②スタッフを含めた共通の問題意識形成と なった。③のレベルでの共有(例えば「床が滑りやすい」こと を改善するための手立てを打つ)が図られたり、②のレベル での共有に留まる等、③のレベルの分かち合いについては、 その参加者が客観的におかれた状況との関わりで、課題の 共有がなされた。	参加者⇒スタッフ	①⇒②、場合によっ ては①⇒②⇒③
2010年度 ＝苦悩期	k	・2009年度末に、それまでのスタッフが家庭 の事情等で辞任せざるを得ない状況になり、 誰がどの仕事を担うかが問題となったこと。	・それまでボランティアやスタッフを担ってきた乳幼児の親で ある澤さん、堀さんが、ひろばの中心的な担い手となった。企 画・運営に関しては、事務局主導の体制にマイナーチェンジ され、スタッフの間で、①、②、③のレベルで、この課題が分かち 合われた。	スタッフ⇒スタッ フ、ボランティア	①⇒②⇒③
	l	・実践Dの将来を考えたとき、手弁当での活 動費捻出には限界があり、活動資金を自分 たちで生み出すためにはどうしたらいいのかが 構想し、実験的に試みる必要があること。	・それまで、ひろば活動の中心的な役割を担っていた堀さん が、実践Dの将来を構想する「構想部」を提案する。他団体 の資金獲得の手法等の調査、地域のニーズや、採算の見 合う事業の模索等の結果、2010年度に「コミュニティ・ラン チ」事業を提案した。①実践Dの将来に対する堀さんの見 通し⇒②スタッフの間での問題意識の共有⇒③別組織を 作り、一部のスタッフが活動の共有レベルで、この課題に取り 組んだ。	スタッフ⇒スタッ フ、地域住民、ボ ランティア	①⇒②⇒③
	m	・初めて実践Dに参加したとき、誰に声をかけ ていいかわからない。誰がスタッフなのか がわからない。何をすればいいのかわから ない。スタッフが特に何をしてくれるわけでも なかった。(エピソード6)	・参加者とひろばの中心的な担い手の間には、その時点では、 「このことをスタッフに話しても大丈夫」という信頼関係が 形成されていなかったため、課題は、参加者とスタッフの間で は共有されなかった。そのため、①参加者の認識レベルで課 題が意識されるにとどまり、②の課題の共通認識のレベルに は達していない。そのため③のレベルにも到達できない。	参加者	①
	n	・「参加している人同士が仲がいいだけに、初 めて来る人にとっては入りづらい。常連しか 来ていないように感じる。『みんな大歓迎!』 といわれても、自分が該当するの不安にな る。」と参加者が感じること(エピソード7)	・課題は、前項の課題mとほぼ同じ内容だが、参加者に、「こ こまで話しても大丈夫」というスタッフとの信頼関係に根差 した安心感があるとき、スタッフにとって「耳の痛い内容」で あっても、スタッフによって、参加者の声が聴き取られるとき、 ①参加者の認識レベル⇒②参加者とスタッフで課題を共 有することができる。課題nの場合には、①⇒②のレベルで、 参加者とスタッフの間で、課題が共有された。	参加者⇒スタッフ	①⇒②
	o	・持続可能な事業展開を行うためには、安定 的な資金や財源獲得が必要であること。	・堀さんは、B市で先進的な子育て支援の取組を行っている 「先輩団体」の代表者たちと連携をはかり、B市においても、 地域子育て支援拠点事業が導入されるように、B市と交渉 を持った。①実践Dの課題の認識は、②B市の子育て支援 の他団体とも共通に認識され、③B市と交渉を持ち、B市も 2011年度より地域子育て支援拠点事業を開始することを 決定し、実践Dはその事業受託の候補として選定された。	実践D⇒B市の先 輩団体、B市	①⇒②⇒③
2011年度 ＝変革期	p	・実践Dが地域子育て支援拠点事業を受託 するにあたり、スタッフの有償化とシフト制導 入に関する体制準備が必要であること。	・そもそも「地域子育て支援拠点事業を受託するのか否か」 の段階についてまで遡り、受託することのメリットデメリット について、「拠点プロジェクト」の中で話し合われた。議論の末、 スタッフの総意により、「地域子育て支援拠点事業」を受託 することを決めた。拠点事業化以後の問題点についても話 し合いが行われた。	スタッフ⇒スタッフ	①⇒②
2012年度 ＝探究期	q	・「ひろばではこんな対応をしたが、本当にあ の対応でよかったのか」と戸惑ったり、判断 に苦しむ場面にスタッフが遭遇することがあ ること。	・実践Dが地域子育て支援拠点事業を受託するにあたり、 ひろば実践の質を担保するためには、実践をふり返るスタッ フMTGおよびスタッフの研修が必要であることが、共通認 識として共有された。このため、ひろばスタッフは「ひろばス タッフMTG」への参加がその要件となり、その場において、② 課題qがひろばスタッフの間で共有され、③各自の活動の現 場で、②で獲得した視点・資源が活用された。	参加者⇒スタッフ ⇒スタッフ	①⇒②⇒③

3-4 小括

ここまで、実践DにおけるMTGの設置状況と、各時期の課題を、エピソードを交え整理した。それらの課題が、誰と誰によって、どのレベルで共有されたのか、どのように解決、または解決されなかったのかについて【表6】に整理した。これによって、以下のことが確認できる。

まず、2007年度の模索期の段階では、参加者側から実践の課題を提起されても(エピソード2=課題b)、「スタッフMTG」が設置されていなかった(エピソード1=課題a)ため、集団的な省察、スタッフ同士の意思の疎通が思うようにとれていないことが課題となった。

「(子どもを)ちゃんと見ていて!」という言葉も、それが不可能な場合には、プレッシャーとなり、ひろばは、親が自信を失う場に転じてしまう。(エピソード2=課題b)

そこで、2008年度からは、親の自己肯定感を高めるような仕掛けとして、①親に活躍の場を提供すること、親に出番を作ること②親の現実には手は差し伸べること等(個別的直接支援)が行われた。また、2009年度以降に実施されている、乳幼児の親の学習実践も親の自己肯定感を高める取り組みとして位置づけられる。(課題f, g, h)

しかし、実践上の課題の全てがスタッフ自身によって把握されるわけではなく、参加者の発言や参加者からの発案によって、意識される課題も数多く上がった¹⁹。(エピソード2, 5, 6, 7)

2008年度には、地域住民参加によるハード面の整備が進められた(課題e)。参加者を巻き込み、「みんなでひろばを作る」という意図は「みんなMTG」(課題j)設置にも現れている。

エピソード3と課題kは、ひろばのスタッフ体制の問題であり、どのような体制でひろばを運営していくがよいのかが、模索されている。

その他に、中長期的な課題として、活動資金の問題も認識され(課題l, o)、B市での地域子育て支援拠点事業の開始は、実践Dの活動資金問題の解決への大きな一歩となった。

【表6】では、特に、参加者がスタッフに問題提起をしている課題b, i, n, mについて、①の「個人の認識レベル」から②の「共通認識としての共有レベル」への移行論理と、②から③の「実践の課題解決にむけた活動の共有レベル」への移行論理についての分析を試みた。

分析から、①から②への移行論理はスタッフから参加者に向けられる「共感的受容²⁰」による信頼関係²¹が、②から③への移行論理は参加者の物理的な実践への関与の条件²²が、関係するのではないかと考える。仮に②から③への移行が物理的に厳しい場合にも、多様な参加のあり方を保障することで、参加者は、部分的・一時的であっても、実践への貢献が可能となるだろう。より重要なのは、参加しやすい多様な途や手法を確保することであるだろう。

最後に【表6】には組み込まなかったエピソード4と課題i, nの関連と差異について述べる。どちらも、信頼関係にかかわるが、課題i, nは、①から②に移行する際の条件として考えられるが、エピソード4は、③の活動を共にすることによって生まれる信頼関係である。その質の違いに注目したい。①から②の信頼関係は、過去に行われたスタッフとのやりとりを参照し、「ここまで言っても大丈夫」という信頼のもと、自己表現・自己開示が進み、スタッフからの「共感的受容」によって信頼関係が発生し、そのことによって、②の段階の連帯が生成されるのではないだろうか。物理的条件を経て、共に活動が担われる時、協働的な信頼関係が現れるのではないかと考える。

信頼と連帯の関係については、「共感的受容による信頼関係⇒②共通認識レベルの連帯⇒物理的条件⇒③活動共有レベルの連帯⇒協働的な信頼関係の生成」という論理で、信頼が連帯を生成し、その連帯を基盤に、新たな質の連帯と信頼を生み出していくのではないかと考える。

4. スタッフの「子育て問題」認識の深化のプロセスと支援構造の変化

この章では、「実践の対象化」を念頭におき、1) スタッフの子育て観・子育て問題認識、2) 支援観・支援実践のあり方がどのように変化していくのかを分析する。分析では、【表1】を用いる。更にスタッフの学習を検討するため、スタッフの連帯5層も考慮しなければならないことから、【表1】の連帯5層をスタッフ仕様に改訂し、【表7】とし、これも用いる。

【表7】 スタッフの連帯5層

誰(何)との連帯か？	スタッフの連帯5層
自分との	連帯i＝自分自身との連帯＝自己肯定感・自尊心の回復,自分自身を価値のある尊厳ある存在として扱う。
パートナーとの	連帯ii＝個別家庭内でのパートナーとの連帯
当事者同士の	連帯iii＝スタッフ同士の連帯
先輩・地域住民・ボランティアとの	連帯iv＝先輩親,地域住民,ボランティアとの連帯
専門職・施設・制度との	連帯v＝専門職,施設,制度との連携

4-1 スタッフの「子育て問題」認識の深化のプロセス

2007年度は、将来構想委員会の議論を受け、「子育ては親が主体的にかかわるべき」「親をお客さんにしない」という理念のもと、実践が開始された。冒頭のエピソード2にある「お母さん、ちゃんと見ててね!」というひろば責任者の発言は、子育てに対する親の自己責任論に与するものではなく、親の主体性に期待し、それを要請する発言として理解可能だろう。理想の子育て像の要請は、実際にそうできない親にとっては、「出来ない自己」(榊2007:175-176)ばかりがクローズアップされ、結果的に親の自己肯定感は低下すると考えられる。

この問題をうけて、堤さんは、「みんなで子育て実践を作ろう」という理念に対しては賛同するものの、実践の在り方については「そうはいつでも、段階というものがある」としている。『親の主体性を大切にすること』ということが、『だからといって、スタッフが何もしなくて良い』ということにはならない」としている。理念上で合意できても、親に対し何をどのようにするのかの具体的な実践の在り方については、堤さんとひろば責任者の間には違いがあったのだという。

この時期は、スタッフMTGが未設置だったことから、堤さんによって、2007年度の実践の対象化がなされたと考えられるが、そこでの子育て問題認識としては、①スタッフ同士の連帯が必要だということ(連帯iii)②親には自己肯定感が必要だということ(連帯I)が、捉え返され、2008年度以降の実践の在り方が模索された。

2008年度は、参加者の親たちが活躍できる場の提供、親の出番(連帯iv)を作ることが意図的に目指され、2009年度は、新たに乳幼児の親たちの学習実践が組織され、親たちの自己肯定感(連帯I)が高まることにより、親同士の連帯(連帯iii)に発展していくことも発見された。

2008～2009年度の実践は、堤さん牽引型の体制だったため、堤さんはそのこと自体を対象化し「ずっとこのままじゃいけない」とし、リーダー(堤さん)不在となっても、運営できる組織の在り方を堤さん自身は意図していくようになったという。

2009年度末には、地域の様々な課題が実践Dに持ち込まれるようになったこと、中長期的にみれば、ボランティア団体のまま、そうした地域課題に対応することには無理があること等が、スタッフにも共通認識され、2010年度は、澤さん、堀さんを中心とした運営体制となった。新体制をバックアップする組織づくりが目指され、ひろば責任者を1人から3人に増員し、事務局主導で企画が立案された。「誰かひとりが大変になる」体制からの脱却が意図されたものの、目指されるべき方向性と現実の間には、大きな溝が生じた。2010年度のひろばの中心的な担い手だった澤さん、堀さんは未満児の子を抱え「ひろば実践」にあたった。澤さん、堀さんの「自分自身の子育て」と「ひろば実践」の両立が模索されたが、「自分自身の子育て」と「ひろば実践」とが矛盾対立するような出来事が頻繁におこり、澤さんは「自分の子どもの自由を犠牲にして一体何をしているの?」と自問自答し、堀さんは「ひろば実践の良さを味わう余裕がない」と感じたという。こうして、澤さん、堀さんの自己肯定感は低下していった。(連帯 i の欠如)

2009年度までの2年間の実践の対象化には、堤さんとスタッフの間にギャップがあった。堤さんの問題意識の根底には「リーダー不在であっても実践が回っていくにはどうすべきか」という問いがあった。スタッフの問題意識の根底には「活動資金不足問題」があり、スタッフには「堤さんは、活動資金獲得の途を模索するために構想部に異動した」という認識があった。

その違いを埋めることのないまま2010年度が終了し、2010年度末に澤さん、堀さんはひろばの担当から退いた。堤さんの「理想の組織体制」の要請は、結果的には、澤さん、堀さんに大きなプレッシャーを与えることになった。これは「新参者と古参者の対立」(レイヴ&ウェンガー 1993:102)として理解可能だろう。

しかし、さらに重要なのは、その対立・矛盾・葛藤をどう乗り越えてゆくかである。2010年度の実践を対象化した湊さんは『理想の子育て実践』をひろば責任者のみに求めることで、そのことがプレッシャーとなり、スタッフの自己肯定感は低下する」とし、「スタッフ自身の『自分自身の子育て』と『実践Dでの子育て』とが矛盾も対立もしないよう、スタッフがちょうどよいバランスを保って実践に関わるにはどうしたらよいのか」を考えたという。湊さんの実践の対象化はスタッフの間で共有され、スタッフ自身の自己肯定感(連帯 i)の必要性、今一度、スタッフ同士の連帯(連帯 iii)の必要性が子育て問題認識として浮かび上がったと考えられる。

スタッフは、自分自身のあり方も含め、自分たち同士の連帯(連帯 iii)と自己肯定感の回復(連帯 i)を経なければ、親、地域住民、ボランティアたちとの連帯(連帯 iv)も立ちゆかないことにきづき、それがなければ、自らを解放していくような子育て実践を実現することは出来ない²³ことに気付いていったのではないかと考える。

これまでの分析の結果を【図5】に示す。【図5】からは、子育て問題レベルでの問い直しが必要ないと、支援実践にとって、「何が必要なのか」の把握ができないため、支援のあり方を変えることができないということが言えるのではないか。

問いを立て、その限界を見つめようとするのには困難が伴うが、それを可能にしたのはスタッフが、共に活動することで生まれる信頼関係によって支えられていたからではないだろうか。

第3章では、課題の共有化プロセス分析によって、誰がどのレベルで、誰と課題の共有をするのかの論理の解明を試みた。信頼と連帯の関係については、「共感的受容による信頼関係⇒②共通認識レベルの連帯⇒物理的条件⇒③活動共有レベルの連帯⇒協働的な信頼関係の生成」という論理で、信頼が連帯を生成し、その連帯を基盤に、また新たな質の連帯と信頼を生み出していくのではないかと考えるが、この点については一層の精緻化を試みたい。

本論は、ケーススタディによるデータ分析であるため、仮説の域を脱することはできない。この仮説を鍛え、より普遍的、一般化に耐えるための研究に励んでゆきたい。

最後に、この研究が、実践Dのスタッフ、特に2007年度の東さん、谷さんの模索、2010年度の澤さん、堀さんの苦悩の上にあるということを明記したい。彼女たちをはじめとする、調査に協力頂いた方々、実践Dに関わる全ての方々、そしてこの研究を支えてくださった全ての方に深く感謝し、本論の結びとしたい。

注

- 1 ヘンダーソン (2008:104) は、「すべての工業社会における生産、商品、サービス全体の少なくとも50パーセント、そして多くの発展途上国では65〜70パーセントが公のG N Pには勘定されていない」とし、我々の生活の6〜7割が「互酬」や「贈与」から成り立っていることを明らかにしている。
- 2 バットナム (2001) p 213より引用。
- 3 詳細については、拙稿 (2013) を参照されたい。
- 4 ここでいう「ひろば」とは、E幼稚園の園庭、ホール、隣接建物の2階部分を開放し、誰もが自由に出入りし、その場を活用して交流する実践をいう。参加費用は無料である。
- 5 平野隆之・日置真世・高橋信也「福祉からまちづくりへ: 釧路での試み」穂坂光彦・平野隆之・朴兪美・吉村輝彦編著『福祉社会の開発 一場の形成と支援ワーカー』ミネルヴァ書房、2013、p 218
- 6 Schön (1983), p18
- 7 Ibid, p19
- 8 ①のレベルで留まる時には、課題は共有されず、したがって、課題の解決には至らない。
- 9 MTGの設置状況に着目するのは、「浦河べてるの家」実践に着想を得たためである。べてるの家の実践では、「三度の飯よりミーティング」として、何よりも話し合うことに重点が置かれてきた。向谷地 (2002:92-97) によれば『『ミーティング』とは、問題を出し合い解決する場ではなく、傷つき、自信を失いやすい者たちがお互いを励ましあうプログラム』であり、「話し合いは支え合い」として位置づけられている。
- 10 2010年度の乳幼児の親の学習会での南出さんの発言。
- 11 澤さん・堀さんへのインタビューによれば、澤さんが2010年にひろば責任者となったのは、「堤さんが構想部に行ってひろばにいらなくなって、ひろばがないと私自身が一番困るから。親子の居場所がなくなるから」という理由でひろば責任者に就任したという。また、堀さんは、「子どもたちが、とりこになっている実践Dに、すこしでも何かをお返ししたかったから」と、それまで、実践Dに自分も子どもたちも助けられてきたことの返礼をしようという意図があったことが確認された。
- 12 2010年夏の堤さんへの聞き取り調査では、堤さんは構想部に移動し、ひろばの現場から離れたことで葛藤が

あったことを語っている。「自分が常に必要とされていた。自分が常に必要とされるゆるぎのない場所がほしい。」という思いは、実は自分のエゴにすぎず、「私は偉くなりたいのか？それともそういう場を作りたいのか？」と自問自答したという。「そういう場」とは「誰もが、自分が常に必要とされている場」のことであり、堤さんは「そういう光景を見たい」と語っている。(2010年7月19日 堤さんへの聞き取り調査より)

- 13 2013年5月28日に実施した湊さんへの追加の聞き取り調査から。
- 14 堤さんへの聞き取り調査より(2011年12月)
- 15 B市子育て支援担当者への電話によるインタビューより(2013年5月)
- 16 これは、小出のいう「③子どもを育てやすい環境、制度、地域社会に作りかえる」のレベルでの「助けあい・支えあい」であり、榊(2012, 2013)のいう「連帯V」である。
- 17 2013年4月2日開催の「ひろばMTG」の記録より。
- 18 2-3の分析枠組みで提示した課題の共有化プロセスの3つのレベルをさす。
- 19 参加者から課題の提起(設定)がなされ、課題の共通認識に至る局面は、スタッフとしての自らの実践が問われ、実践の限界が明らかにされ、スタッフの視点と参加者の視点の二重性に引き裂かれることを意味する。この葛藤状態を統合するためには、スタッフは、スタッフとしての「個別的自己」(宮崎2004:9)の視点を離れ、参加者の視点も包含した「普遍的自己」(同上)の視点に立たなければならない。実践者としては苦しい局面であるが、課題が提起されるということは、別の側面からみれば、実践の在り方を問う機会を得るという点でポジティブな契機でもある。
- 20 宮崎(2004:12)からの引用。
- 21 その根拠として、課題i, 課題b, 課題nは、参加者が、それ以前にスタッフから「あ～！また来てくれたんだ！」「またおいで～」「待っているからね～」と声を掛けられたことが関係していると考えためである。こうした声掛けは、自分が受容されていることとして理解され、「ここまで語っても大丈夫」という信頼を生み出しているのではないかと考えるためである。課題mは、その日が初参加の状況だったため、「ここまで語っても大丈夫」という関係はまだ作られておらず、そのことにより、②の段階へと移行しなかったのではないかと分析した。
- 22 堤さんへの調査からは、実践Dに様々なアイデアを提供してくれる南出さんに対し堤さんは「スタッフにならないか」と声掛けしたが、物理的な条件があわず、南出さんはスタッフになることを断念したことがわかった。このことから、②から③への移行には、スタッフとしての物理的条件が満たされることが必要になると考えられる。
- 23 「自らを解放していくような子育て実践」とは、具体的には、澤さん、堀さんが「自分自身の子育て」と「ひろば実践」との間に挟まれ、引き裂かれていた状態からの解放を意味する。スタッフもまた誰かの支えを必要とすることが自覚されるとき、スタッフを支えるための構造が模索されるのではないかと考える。

引用・参考文献

- 出口泰靖(2013)『『子育て〈支援〉』にこじれ、『〈支援〉される家族』にこじれて。一家族ケアの『私事化』と『脱私事化・脱家族化』とのほざまで』『支援』編集委員会編『支援vol.3』生活書院
- ファイマン、マーサ・A.(2003)上野千鶴子監訳・解説、速水葉子、穂田信子訳『家族、積みすぎた方舟 ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房
- ヘンダーソン、ハイゼル(2008)柴田譲治訳『〈片側経済〉との訣別』バベルプレス
- 平野隆之・日置真世・高橋信也(2013)「福祉からまちづくりへ: 釧路での試み」穂坂光彦・平野隆之・朴兪美・吉村輝彦編著『福祉社会の開発 一場の形成と支援ワークー』ミネルヴァ書房

- 星加良司 (2012)「当事者をめぐる揺らぎ—『当事者主権』を再考する」『支援』編集委員会編『支援vol.2』生活書院
- 稲沢公一 (2002)「援助者は『友人』たりうるのか—援助関係の非対称性」古川孝順・岩崎晋也・稲沢公一・児島亜紀子著『援助するということ』有斐閣
- 岩田美香 (2000)『現代社会の育児不安』家政教育社
- 小出まみ (1999)『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房
- 小出まみ (2000)「いまどきの子育ての楽しみ方・ささえ方 —カナダの子育てに学びながら—」青森県国民教育研究所『教育情報青森』No.103
- レイヴ, ジーン／ウェンガー, エティエンヌ (1993) 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 —正統的周辺参加—』産業図書
- 宮崎隆志 (1997)「文章クラブ『色えんぴつ』にける意識変化」山田定市編著『地域づくりと生涯学習の計画化』北海道大学図書刊行会
- 宮崎隆志 (2004)「協同における出会いと学び」北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室『社会教育研究』第22号, pp.1-18
- 宮崎隆志 (2008)「家族の危機と協同的支援ネットワークの課題」『北海道大学大学院教育学研究院 子ども発達臨床研究』第2号, pp.21-34
- 向谷地生良 (2002)「三度の飯よりミーティング 話し合いは支え合い」浦河べてるの家『べてるの家の「非」援助論』医学書院, pp.92-97
- ヌスバウム, マーサ・C. (2005) 池本幸生, 田口さつき, 坪井ひろみ訳『女性と人間開発』岩波書店
- 大豆生田啓友 (2006)『支え合い, 育ち合いの子育て支援 —保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論—』関東学院大学出版会
- バットナム, ロバート・D. (2001) 河田潤一訳『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT出版
- 榊ひとみ (2007)「子育て問題学習における省察的自己教育課程」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』103号
- 榊ひとみ (2010)「子育て家庭の孤立化の論理」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』110号
- 榊ひとみ (2012)「子育て問題研究の展開と課題」北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室『社会教育研究』第30号
- 榊ひとみ (2013)「地域子育て支援拠点における学習と連帯 —乳幼児の親に即して—」北海道教育学会『教育学の研究と実践』第8号
- Schön, Donald A. (1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*, Basic Books, Inc.
- Schön, Donald A. (1987) *Educating the Reflective Practitioner*, Jossey-Bass Publishers
- ショーン, ドナルド・A. (2001) 佐藤学, 秋田喜代美訳『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』ゆみる出版
- ショーン, ドナルド・A. (2007) 柳沢昌一, 三輪建二監訳『省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房
- 清水新二編 (2000)『家族問題 危機と存続』ミネルヴァ書房
- 高橋重宏 (2007)『日本の子ども家庭福祉 —児童福祉法制定60年の歩み』明石書店
- 上野千鶴子 (2003)「[解説]家族, 積みすぎた方舟」マーサ・A・ファイマン著, 上野千鶴子監訳・解説, 速水葉子・穂田信子訳『家族, 積みすぎた方舟 ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房
- 上野千鶴子・中西正司編著 (2008)『ニーズ中心の福祉社会へ—当事者主権の次世代福祉戦略』医学書院
- 上野千鶴子 (2011)『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』太田出版
- Wenger, Etienne (1998) *Communities of Practice*, Cambridge University Press

山田定市編著(1997)『地域づくりと生涯学習の計画化』北海道大学図書刊行会

Staff Learning and Association in Community Drop-ins at Child Care Support Services

Hitomi SAKAKI

Key Words

supporting system with circulated structure, process of problem sharing, relationship of trust, objectivization of practice

Abstract

This study determines the process of “associational socialization” in nurturing and childcare. Mami Koide (1999) suggests “reciprocity” as “a system of supporting each other in raising children.” As an extension of Koide’s hypothesis, this study investigates the development of the system of supporting each other in raising children through a case study analysis of community drop-ins in child care support services.

Sakaki’s hypothesis (2013) concluded that Koide’s system would have a circular structure. This study evaluates the precondition of circular structure community drop-ins in child care support services.

This study discusses the following: 1) Within organizations, support systems for parenting and supporters should have circulated structures. 2) To present a new perspective on parenting support systems, staff at community drop-ins of child care support services should objectivize their self-generated practices. 3) The precondition for objectivizing self-generated practices is a relationship of trust between staff members, fostered by sharing the same problems and tasks.